

私が事業団に来て、最初に「ヘッ」と思ったことは、当番があつて毎朝、はき掃除とモップによるふき掃除をすることだつた。もちろん、便所掃除も。しゃがんで、目の高さに「朝顔」の先を見た時は、さすがに気味悪かつた。しかし、ついにやりきつた。

新人は必ず便所掃除の現場を体験すべきだ。これをやれば、あとは何

でもやれる気になる、という話を聞いていた私は、「これで、自分も事業団の一員になれた！」という、こみあげてくるさわやかな感動にひたることができた。

だが同時に、「それにしても」という思いが、私の中で大きなものとなってきた。

実は、事業団の事務所は、以前、全日労の事務所だった。いま掃除し

た便所も、十年くらい使っていたことになるが、一度たりとも私が掃除をしたことはなかった。パートのおばさんを頼んでいたのだが、その記憶すらあいまいだ。一体これはどういうことなのか……。この思いはその後の企画の底流に一貫してあった。

悪いことをしたら
便所掃除をさせられる

さて、新年を迎えた私は、入学を控えた娘から、シヨッキンクな話を聞かされた。

「小学校にいくと、悪いことしたら、立たされたり、便所掃除させられたりするんだって。…」

友だちのお兄さんの話だという
が、私はアタマにきて、「じゃ、保育
園の便所を掃除してるおばさんは、

何か悪いことをしたのか」「うちの便
所を掃除してゐるおかあちゃんは（そ
のころまでうちの便所は妻にまかせ

きりだった)何か悪いことした罰で、
やっているのか」と娘に聞いただし、
『じぎょうだん』の「編集長から」

というコラムにも、一言書いた。それでも気がおさまらないので、住井すゑさんに手紙を出した。

以前、「童話のはなし」というタイトルでインタビューをお願いしたとき、住井さんは、「良いこと」「悪い

こと」をそれ自体で評価するのでなく、「ほうび」「罰」という、「見返り」

を強調する重話ばかりだ。これだと、「よいこと」は強制されるものとなり、権力につこうのよいものが「よいこと」になる、という趣旨の話をされていたからだ。

住井さん宅に伺ったところ、「罰で便所掃除とは」という、私が「じぎょうだん」新聞に書いたのと同じテ

「マで、三十数年前、小説を書いたことがある、と聞かせてくれた。」「便所掃除は宿題を忘れてくるような無

責任な子にやられたらかなわない。こまかく気がつく優秀な子の仕事だ」と。そして、その小説がのった

雑誌原稿を探していたとき見つかったという旧原稿十数篇を「よかつたら、あげます」と、くれたのである。

心を一に技術を高めて
（これは『じぎょうだん』新聞に連載中）

仕事をしている
住井さんの話を大きくのせると、

「東京でも西宮でも、事業団の最便所掃除にまつわる話がいっぱい聞こえてきた。

初の仕事は便所掃除だった。これをきれいにやりきることで、信頼されるようになったんだ」という歴史も

「おれも、子供とやりあったことがある。『父ちゃんの仕事は何?』『便所

掃除だ。『そんなこと、学校で言えな

聖で場所排除とは!

私も30年前、このテーマで小説書いたんです

[illegible]

何が一番大事か

みなさん誇りをもって

私は、「娘がきたよ
言った子は、親がいか
た、その時だけ人がか
つてくれたからウソを
いかなじやないかと
い、その少年の孤独な
い、深い哀しみを感
んぶ。」

少年にとっては、ウ
じやないんです。そ
話から少年の孤独な
思ひやつて、大人は
どういうことをして
いけな、ふりかえら
それが教科書では

「ウソをついたらけ
い」なんて、

園の便所を掃除してゐるおばさんは、何か悪いことをしたのか、「うちの便所を掃除してゐるおかあちゃんは（そのころまでうちの便所は妻にまかせきりだった）何か悪いことした罰でやっているのか」と娘に聞いただし、『じぎょうだん』の「編集長から」というコラムにも、一言書いた。そ

心をこめ技術を高めて
仕事をしている

住井さんの話を大きくのせると、
便所掃除にまつわる話がいっぱい聞
こえてきた。

「東京でも西宮でも、事業団の最

そういふ私の友人に、
「不工さんか、私に手紙が来たが、その子が英学校に入らなう。宿願も果たしたか、字ができないから、三、四人で草紙で書いたのを見て喜んでさうな。他の子も普通の授業時間なのに、」
それで頭が先生に「どうしてか」と聞いたら、「宿願やてこなした。頭はうと立派な話。僕はハラでなはなははと喜んでゐる。こゝろ守るゝといふみこそ其のことであり、百姓や労働者、その文化人あるに、労働の大切を教えないで、天皇制をいふのはおかしき事である。こゝろ守るゝといふみこそ其のことであり、百姓や労働者、その文化人あるに、労働の大切を教えないで、天皇制をいふのはおかしき事である。こゝろ守るゝといふみこそ其のことであり、百姓や労働者、その文化人あるに、労働の大切を教えないで、天皇制をいふのはおかしき事である。」

以前、「童話のはなし」というタイトルでインタビューをお願いしたとき、住井さんは、「良いこと」「悪いこと」をそれぞれで評価するのでなく、「ほうび」「罰」という、「見返り」

初の仕事は便所掃除だった。これをきれいにやりきること、信頼されるようになったんだ」という歴史も知った。

「おれも、子供とやりあったことがある。『父ちゃんの仕事は何？』便所掃除だ。『そんなこと、学校で言えな

いよ。会社員でいいだろ」「ダメだ。掃除屋だ」と。おれは、人にいえないような、やましい仕事はしていない、ということの子供にわかってほしかったんだ」という話には感動した。

だが、やっぱり、「便所掃除だけはやりたくない」とか、「人に見られたらいやだ」とかいう気持ちも根強くあることもわかった。

そこで私は、この便所掃除の意味、位置づけを明確にし、掃除をするみんなの気持ち語りあう中で、本当に誇り高く働けるようになってほしい、そんな思いで座談会を開いた。

「どうやってやったのかと思うが、カベの高いところに立派なのがしてある」「(精神病院)」「試験期になるとドアが破られ、タイルが割られる。トイレトーパーはハンカチがわり(予備校)といった実態から、「一般の業者から事業団に替わり、若手が便所をやったら精進者とみられた(病院)」「弱いものいじめのよう

な感じで、無意識に汚される(公園)など、便所掃除がどう見られているかの問題、「下請け化反対」と労組は言うが、最初に下請け化されるのは掃除だ」という指摘。そうした中でも、「水ぶきは転ぶし危ないので、ふだんはモップの二回ぶきにした(養護学校)」「汚水管までふくめてトイレの総合管理(本部)」というように、心をこめ、また、技術力も高めて仕

事をしている例が豊富に語られた。私は、この話を第一面全部をつかって紹介、ひきつづき、いろいろな現場の連載を始めた。

座談会にのつた新聞を黒板にはり出してくれた

モップを洗う場がなく、「大」の方で流しながら洗うか、洗面所で洗うしかない、というような、清掃のことを考えないビルの構造を問題だと思っていたら、廊下というものがなく、必然的に教室の中に便所がある(ツイタテは一枚あったが)という利用者・学生の人権も考えない予備校の構造には、わが目を疑った。

まだ背景の取材はしていないが、高齢者の社会的・経済的環境の深刻さをうかがわせる話もずいぶん聞いた。公園の便所に近くの団地のおばあさんたちが朝、いつも用足しに来る。嫁さんに「(便所を)汚すから外でやってきてよ」などと言われるかららしい。老人ホームでは紙代や水道代の節約のため自分の部屋のを使わず、共用のを使う……。

「きれいにすれば、きれいに使ってくれる」という真実を聞いたかと思うと、「きれいにしすぎるから浮浪者がねぐらにする」という「難題」にもぶつかった。

「赤旗」のコラム「潮流」で「鋭い問いかけ」と紹介してくれたおかげで、

便所掃除の現場を覗く

予備校
今回は東京の予備校、まずはどんな建物なのか、どんな問題があるのかをみてみる(本誌・編集)

ワ外の階段からドアを開けると、東京のお茶の水、通学あたりは、貸しビルがぎっしりと立ち並んでいて、中々、めだつものがない。予備校、大学受験のものだけでなく、司法試験をはじめ各種の資格試験のための予備校が、一軒二軒と点々と入っている。その一つに入ってみてみる。



トイレトーパーをシンにはめこむ人はいない。床には黒い油が……

34
当然、トイレもこの教室の中。申しわけないのついでに、きれいな左便方に男子用と女子用。

一方、別の通学予備校。ここも一階はドア出入り、建物の外側の階段を利用して、上って、ドアを開けると、中をつづいて、黒板の左側のドアを開けたところに水飲み場とトイレがありま

廊下をなく教室のドアを閉める

ここは、各階とも白人ほど入れる教室で、男女共用のトイレ。廊下のある予備校で、

と、便所のまわりには使われています。タバコの火で黒く焼け、ボイ捨て。トイレトーパーは、いつも予備校をいれるのですが、新しいのを使つた人、シンにさして、きちんとはめこんでいる人はほとんどいない。物取主任の謝罪会と



「ワワ、トイレトーパーが入道室のように(高橋さん)」

学校教育の中で、便所掃除の位置づけについてなど、思いもよらない人

たちからの情報も寄せられた。

中でも、うれしかったのは、事業

団が清掃している現場の一つ、ちば

市民生協八街センターのセンター長

が、生協の連絡用黒板に、この座談

会の新聞をはりだしてくれたこと

だ。「気にとめて、一度読んでくださ

い」と書きこみ、「トイレは顔。便所

がきれいなら、そこに住む人の心が

きれいになる」という部分を赤ワク

で囲んで。

このことを通信してきた船橋地域

事業団の鈴木麻理子さん(二八)は

「男子トイレの掃除中に、センター

長が用を足しに入つてこられた時も

何回かありましたが、自分は緊張し

て手を動かし続けるのみです。状況

からして、おたがい、無言になって

しまいますよね。でも、「じぎょうだ

ん」新聞で正面からとりあげてもら

ったおかげで、トイレをみがく者と、

そのトイレを使う人とのあいだに交

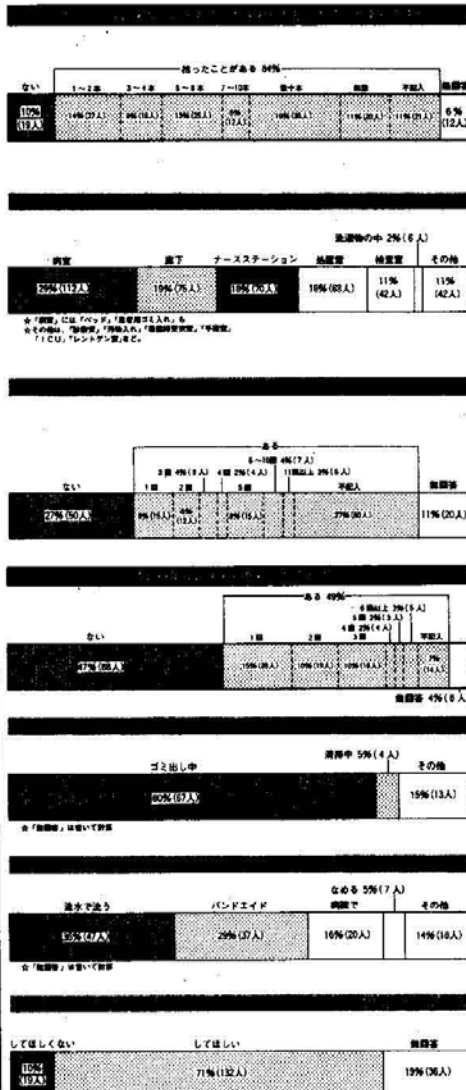
病院と協力 根本改善を

就労4ヵ月以上で、清掃を主とする187人の集計

異常事態

病室から看護婦更衣室まで病院中に針が

刺した事故は、ゴミ出し中が80%にも



この実態調査は各方面から注目され、国会（社会労働委員会）をはじめ、マスコミ、医療薬品業界からの問い合わせが殺到した。

単なる下請けでなく
主人公の一員として働く

流の芽をつけてもらえました。セン
ター長に読者になってもらえらるまで
の緊張感と、まだまだ事務的な日ご
ろの関係を思うと、これはスゴイこ
とです。体の中がカッカしてくる
ほどでした」と書いています。

「トイレをみがく者と、使う人との
交流の芽」——私が事業団に来て
初めて便所掃除をした時の反省が、
こんなふうになってきた……。うれし
かった。

ところで、私が「じぎょうだん」
新聞を編集し始めた二回目、昨年七
月一日号から一年余にわたって連載
している「捨てるゴミの向こう」も
同様の狙いをもっている。

これは、病院清掃の仕事をしてい
る仲間が、院内のあちこちに落ちて
いる使用済み注射針等によってケガ
をし、院内感染の危険にさらされて
いる問題を取りあげたものだ。

連載開始直後に、三重大学病院で
医者がB型肝炎に感染、死亡する事
件がおり、「注射針事件」が社会的
な大問題となったが、厚生省も労働

省も、病院清掃労働者については「医
療従事者」として扱っておらず、何
の対策もたてていなかった。また、
清掃労働者も、その多くが「下請け」
であり、職場への定着率も悪く、モ
ノが言えない状態にあった。

そこで、「じぎょうだん」新聞では、
全国アンケートを行ない（四〇病院、
二三人から回答）、二人に一人が「注
射針を刺した」経験があることなど実
態を明らかにした。そして、医者、看
護婦等に「捨てるゴミの向こう」を考
えない働き方になってしまっている
のではないか、ということをと、拾った

針の場所と本数などを示しながら、率
直に問題提起していった。

こうした中で、事務長、総務長、
労組委員長と清掃労働者全員の懇談
会等を紙面で企画、病院と事業団と
の関係が目にみえて親密な、信頼感
あふれるものになってくる典型を
つくりだした。つまり、単なる下請
けではなく、一緒に安全で清潔で心
のこもった病院をつくらせていくパ
ートナー、病院の主人公の一員として、
受け身ではなく、積極的に考えなが
ら仕事をし、提案もし、新たな事業
にもりだしていく、という状態を、
新聞がリードしながら切りひらいて
きたのだ。

私は「便所掃除」と「捨てるゴミ
」の二つの企画を通じて、底辺か
ら社会のありようをつかめるようにな
ってきた気がする。また、労働者
にとって、自分の位置、役割が明確
になってこそ、主体性が発揮され、
誇りが生まれ、専門職としての仕事
へのつつこみも本物になる、という
ことを見てきた。

そして、単に私の全日自労時代の
反省というだけではなく、労働者ど
うしが、あまりにも、おたがいを知
らなすぎる、分断されたまま、こ
こをつなげなくては、という思いに
かられるようになってきた。機関紙
が追求すべき役割も、ここにある、
と思う。

（まつざわ・つねお）